

早期支援にかかる効果的な巡回相談

M県I市での巡回相談を振り返って

片瀬 道

(アスム療育・研修センター)

KEY WORDS:巡回相談、モデルケース、スキルアップ

(目的) 筆者がM県I市で行っている発達支援事業『療育アドバイザー事業』の成果と課題を検証し、そこから早期支援にかかる効果的な巡回相談のあり方を検討したい。

特別支援教育の充実に伴い、発達障害の早期支援に関しても各地域で様々な取り組みがなされ、その一つとして保育所等への巡回相談が各地で行われている。しかし、I市のような地方小都市では利用できる資源は限定されており、それをどう有効に使うかは課題である。そこで筆者は、巡回相談を子どもの問題の直接的な解決にのみ焦点を当てるのではなく、むしろ地域の支援力を高めることをねらいとした支援者支援と位置づけ本事業を進めてきた。事業開始より8年目の2016年度末に、関係する保育士とその管理者に実施したアンケートの結果に基づいて本事業の成果と課題を検討したい。
事業概要: 本事業の対象施設は市内全保育所(11施設)。実際に巡回するのはその中の2か所2名に限定し、その2名をモデルケースとして扱う。筆者が現場で行動観察を行った同日午後検討会を行う。検討会には担当保育士に加え、本事業受講生として市内全保育所から各1名(年間で固定)の保育士が参加。研修会場に集合して検討会を行う。検討会では子どもの行動像を参加者全員がビデオ動画で確認。巡回は年10回、月ごとに交互に訪問しその月のモデルケースとする。

(方法) **方法:** 質問紙による回答。各施設に質問紙を配付。回答は4件法。点数化(よい:4点⇔よくない:1点)して分析。質問紙は次の3つの項目からなり、1~3それぞれに複数の質問を行った。1事業のもち方について 2気になる子への視点 3通常の保育への視点 **対象:** 本事業受講生(市内全保育所:公立・民間合計11か所)11名とその管理者11名。なお対象者と市役所担当課に対しては事前に文書で本研究への同意を求め承諾を得ている。

(結果) 1事業のもち方について ①モデルケースという考え方で進めることの可否:<一人の子どもを通年で経過観察すること>と<ビデオ動画の導入>にはいずれも3.8点(4点満点中:以下同様)の高評価。「継続的なので児の発達・成長が見られる」「変化の過程がよくわかる」。動画に関しては、「特徴がとらえやすく参加者どうし共有しやすい」とされた。その月の対象児の担当者を除いた10名の保育士は、他施設在籍の子どもから学ぶということになる。この点について「他施設の取組み(関わり方、環境構成等)が見られるのでよい」といった感想が多数を占めた。一部で「対象児に実際接していないのでわかりにくい」という意見もあり、評価はやや低い3.5点。全体としてモデルケースを進めることには理解が得られていると考えられる。②ワークシートの使用について:その有用感を<本事業に対して>と<自分の保育に対して>とで質問。有用感が高い(いずれも3.8点)。『特性把握シート』では、「特性が整理しやすい」「普段見落としがちな点に気づく」「実践につなげやすい」。『目標設定シート』では「経過を追うことの大切さに気づく」「普段子どもたちに何気なくさせていることが実はたくさんの行動のつながりだった(保育士)」「観察を意識して記録することで力がつく(管理者)」など、保育士のスキルアップにつながっている。一方<『特性把握シート』の書き方>に関しては評価が分かれた。民間と公立で差があり、民間受講生は低評価(2.4点)。

「発達がとらえやすい」「慣れるまでは難しいところもあるが、書いているうちにポイントがわかってくる」というものもあるが、「どの欄に記入するか迷う、よくわからない」という感想も多かった。民間にはこの事業への参加年数が少ない施設が含まれるなどが要因と考えられる。③グループワーク主体の検討会について:3.8点と高い。筆者としては発表なども含むグループワークには抵抗があると予測していたが、「色々な意見が聞けて気づきが多い」「自分にはない視点が新鮮」など、否定的な意見は全くなかった。2気になる子への視点 事業での学びは①<クラス内での気になる子への視点の広がり>に役立つか>には3.9点の高得点。「支援の仕方、環境構成などの学びが頭に浮かび役立つ」「会議で話し合う時にも広い視野がもてる」など現場に持ち帰って役立っている様子が数多く報告された。②<施設全体に対して気になる子への視点が広がっているか>は3.7点。「子どもの特性を考えるようになった」「経験のない職員もみんなで共有し関わろうという意識がでてきた」といった感想が多く、自分の担当児に引き付けてとらえていることがわかり、市全体の保育士の支援力向上につながっているといえる。3通常の保育への視点 事業での学びは①<クラス内の保育に役立っているか>:3.9点「気になる子に対しての援助の仕方はもちろん、他児に対してもユニバーサルデザインという過ごしやすい環境設定を考えるようになった」「気になる子と他児との関わり、集団の中での支援など参考になるものが多い」など、受講生が自分のクラス全体の保育の質向上に役立つという評価をした。②施設全体の保育に役立っているかについて:3.4点でやや低い。民間(管理者、受講生とも)にやや低い傾向があり、全体への伝達や具体的な支援について自信のない施設が一部にある。

(考察)保育士の支援者としてのスキルアップにつながるよう、巡回相談に研修の要素を取り入れ本事業を進めてきた。対象児をモデルケースとして扱うことで子どもとその支援とを細かく経過観察できた。検討会には、現場で活かせる考え方、支援方法、シート類の使用といった視点が盛り込まれた。さらにグループワークを取り入れたことが、学びの主体性や幅広い視野をもつことにつながっており、筆者の予測を超えて効果的であったことがわかった。

各施設がそれぞれに抱えている障害のある子や「気になる子」を直接扱うのではないからこそ受講生は考え方を学びやすくなったといえる。シートといった子ども自身や問題を整理するための枠組みは、施設に帰ってからの職員間の共有ツールとして役立つこともわかった。シートに関しては一部に作成が難しいという意見もありつつ徐々に使いこなせている様子も窺えた。管理者の目から見て「子どもを意識的に観察し記録することで力がつく」という評価があったことは本事業のいちばんの成果であろう。受講した保育士だけではなく施設全体に考え方が浸透することで地域の支援力を向上させるという当初の目的に多少とも沿うものといえる。単なる困りごと相談のような巡回相談ではなく、研修型にすることで保育士自らが学び、支援力向上につながると考えられる。整理と共有のために不可欠なシート類については更なる整備が今後の課題となるだろう。(KATASE Michi)